

有朋自遠方来

一国の美術館、博物館の数はその国の文化度を示すと言われ、美術館、博物館は文化のシンボリック的存在となっています。従って、外国を訪れる際は、先ず、その美術館、博物館を訪れるのが礼儀であると言われています。

しかし、最近の我が国の傾向を見ますと、美術館、博物館の数がその国の文化度を示すということには少々疑問を禁じ得ません。この10年間に日本の美術館、博物館の数は急増し、それは日本人の文化的向上として喜ばしいことではあるはずですが、一方で、そのような施設の形骸化が問題となり、幾度か指摘されていることも事実です。收藏品や館員の充分に整わぬままに、公立の美術館、博物館が文化的名称を持った単なる巨大な器として、あちらこちらにそびえています。美術館の種類は多く、古美術、近・現代美術は元より、絵画、陶芸、書など美術の分野別に美術館が建てられ、博物館も、考古学的、民俗学的、歴史学的、文学的、科学的博物館と、様々です。しかしながら、乱立する全ての同施設が本



当に收藏すべき価値ある資料を持ち得るはずもなく、従って、単に行政的なペースに乗った建設が行われているということも多いようです。美術館、博物館は、その数においてより、その質によってこそ、その国の文化度を推しはかるべきでしょう。

海外における我々の未知の博物館の数は推しはかる術もありません。その関係者が当館を訪れることもしばしばです。例えば、9月20日の来訪者はスイスのボア美術館の副館長でありました。スイスの首都ジュネーブにあり、東洋陶磁を多く收藏しています。また、9月28日には西ドイツのデュッセルドルフにあるヘティエンス陶磁博物館の館長が訪問されました。同館では近く、東洋陶磁の展覧会を開催の予定とのことで、その下見ということでした。

我が大和文華館は、私立ながら海外の美術館、博物館案内書にも登場しており、このような未知の美術館関係者が訪れて下さることは我々の驚きでもあり、思いがけない喜びでもあるのです。

(写真左) ヘティエンス陶磁博物館々長(左)

(写真右) ボア美術館副館長クーロリー女史

季刊 美のたより No.34

昭和50年11月10日

発行 大和文華館